

メカニカルに組成されたわたし①の感覚には湿気を嫌ふ冬の風のしたに適して
みた。そしてわたしの無償な時間の劇は物象の微かな役割に荷はれながら確
かに歩みはじめるのである……と信じられた (一九五〇・一二)

街々の建築のかげで風はとつぜん生理のやうにおちていった。その時わたし
たち②の睡りはおなじ方法で空洞のほうへおちた。数かぎりもなく循環したあ
とで風は路上に枯葉や塵埃をつみかさねた。わたし③はその上に睡った。

わたし④は不幸をことさらに掻き立てるために
自らの睡りをさまさうとした

風はわたしたちのおこなひを知つてゐるだらう

風はわたし⑤たちの意識の継続をたすけようとして。わたしたちの空洞のなか
をみたした

わたし⑥たちは風景のなかに在る自らを見知られないために風を寂かに睡らせ
ようとした

〈風は何処からきたか?〉

何処からといふ不器用な問ひのなかには。わたしたちの悔恨が跡をひいて
みた。わたし⑦たちはその問ひによつて記憶のなかのすべてを目覚ましてきた
のだから

〈風は過去のほうからきた〉

建築は風が立つとき揺動するやうに思はれた。その影はいくつもの素材に
分離しながら濃淡をひいた。建築の内部には錘鉛を垂らした空洞があり。そ
こを過ぎてゆく時間はいちやうに暗かつた

わたし⑧たちは建築にまつはる時間を。まるで巨大な石工の掌を視るやうに驚
嘆した。果てしないものの形態と黙示とを確かに感ずるのだった

〈風よ〉

風よ。おまへだけは……

わたし⑨たちが感じたすべてのものを留繫けいりゅうしてみた

① 〈抽象させられた史劇の序歌〉 271 ~ 273 (56)

北川透「吉本隆明の詩―『固有時との対話』
について」『国文学』一九七一年七月
宮城堅『吉本隆明―冬の詩人とその詩』一九
七三年一月、国文社

② 〈風が眠る歌〉 321 ~ 322 (98)

「建築」⇨「わたしたち」⇨「空洞」

→ 「風」

「眠り」⇨⇨「意識」

← 「時間」「悔恨」「記憶」「覚醒」

※「風」は「意識」の継続を支え「留繫」
するものである。

③ 〈建築の歌〉 323 ~ 324 (99)

ひとりでに物象の影はとまつた（建築・路上・葉をふり落としたあとの街路樹の枝）そしてゆるやかな網目をうごかしはじめた 網目のうへでわたしたちは寂かに停止した自らの思念をあゝの時間のなかで凝視してゐた（あ・そのとき神はゐない） わたしたちは太古の砂上や振子玉のついた寺院の薨のしたで建築の設計に余念なかつた時のやうに明るさにみだされてゐた

わたしたちは 〈光と影とを購はう〉と呼びながらこんな真昼間の路上をゆかう そしてとりわけ直線や平面にくぎられた物象の影をたいへん高貴なものに考へながらひとびとのはいりたがらない寂かな路をゆかう 何にもまして

わたしたちは神の不在時間と場所を愛してきたのだから

（神は何処へいつた こんな真昼間）

ひとびとは忙しげにまるで機械のやうに歩みさり決してここに空洞を容れる時間をもたなかつた だから過剰になつた建築の影がひとびとのうしろがはに廻る夕べでなければ神はここに忍び込まなかつた

わたしたちの思念は平穩に そして覚醒はまるで睡りのやうに冴えてゐた

わたしは慣はしによつて歩むことを知つてゐた しばしば慣はしによつて安息することも知つてゐた わたしに影がさしかかるときわたしの時間は撩乱した 風は街路樹の響きのなかをわたつて澄んだ わたしの樹々で鳥は鳴かず わたしの眼はすべての光を手ぐりよせようともしないでさしてまとまりのない街々の飾り窓を視てゐた 視界のおくのほうにいつまでも**孤独**な塵まみれの凹凸があつた

わたしは誰からも赦されてゐない技法を覚えてゐて建築の導く線と線とを結びつけたり 面と面とをこしらへたりした **わたし**の視覚のおくに孤独が住み着いてゐるまるで光束のやうに風景のなかを移動した

（明日**わたし**はうたふことができるかどうか）

予感されないままに わたしは自らの願ひを規定した

わたしは**独り**のときすべての形態に静寂をみつけた それからすべての形態はその場処に自らを睡らせむやうに思はれた とりわけ：雲が睡入るさまはわたしをよるこぼせた 建築のあひだや運河のうへで雲はその形態のまま睡入つてしまふやうに思はれた

第二セクション

「光」↓「影」を生む

直線や平面にくぎられた物象の影

真昼間⇌神の不在

夕べ⇌神が忍び込む時間

「わたしたち」↓「わたし」

人称問題 川鍋論

第二章二節「わたしとわたしたち」参照

「孤独」と「わたし」の同時発生

思考が動くこと

対象が動かないこと

④ 〈雲が寝入る間の歌〉 325〜326 (101)

わたしはその静寂の時をとめた 雲は形態を自らの場処にとめる すると静寂はわたしの意識をとめてしまふやうであつた 忘却といふものをみんなが過去の方向に考へてゐるやうにわたしはそれを未来のほうへ考へてゐただから未来はすべて空洞のなかに入りこむやうに感じられた

〔わたし〕の遇ひにゆくものたちよ

それは忘却をまねきよせないためにすべて過去のほうに在らねばならない

来歴の知れないわたしの記憶のひとつひとつにもし哀歎の意味を与へようと思ふならば わたしの魂の被つてゐる様々の外殻を剥離してゆけばよかつたはずだ

けれどわたしはX軸の方向から街々へはいつてゆくと 記憶はあたかもY軸の方向から蘇つてくるのであつた それで脳髄はいつも確かな像を結ぶにはいたらなかつた 忘却という手易い未来にしたがふためにわたしは上昇または下降の方向としてZ軸のほうへ歩み去つたとひとびとは考へてくれてよいとしてひとびとがわたしはの記憶に悲惨や祝福をみつつけようと願ふならば 〔わたし〕の歩み去つたあとに様々の雲の形態または建築の影をとどめるがよい

わたしは既に生存にむかつて何の痕跡を残すことなく 自らの時間のなかで意識における誤謬の修正に忙しかつた

時は物の形態に影をしつかにおいて過ぎていつた 〔わたし〕は影から影にひとつのしつかりした形態を探してゐるいたのである おう 形態のなかに時はもとのままのあのむごたらしい孤独 幼年の日の孤独をつつんだまま立ち現はれるかどうか 〔わたし〕は既に忍辱によつてなれきつてゐたので ただ衰弱した魂が索してゐたのである あのむごたらしい孤独 幼年の日の孤独がいまほどのやうな形態によつて立ち現はれるかを あたかも建築と建築のあひだにふと意外にしづかな路上や その果ての樹列を見つけ出して街々のなかの暗い谷間を感じたりすることがあるように もしかしてわたしのあの幼い日の孤独が意外な寂けさで立ち現はれるのを願つてゐたのだ

物の影はすべてうしろがはに倒れ去る 〔わたし〕は知つてゐる 知つてゐる影はどこへゆくか たくさんの光をはじいてゐるフランス水車のやうに影はどこへ自らを持ち運ぶか わたしはよろめきながら埋れきつた観念のそこを掻きわけてはひ出してくる まさしく影のある処から 砂のやうに把みさらさらと落下しまたはしわを寄せるやうにも思はれる時の形態を 影を構成するものを たとへば孤独といふ呼び名で代用することも 〔わたし〕はゆるしてゐたのだ 何故なら必ず抽象することに慣れてしまつたころは むごたらしいといふことのかはりに過ぎてゆくといふ言葉を用ひれば あの時と孤独の流れとを繋ぎあはせることができたから

雲は形態を変える
動く意識上

建築は影を変える

外殻の剥離 || 記憶の抽象化?

⑤ 〈並んでゆく蹄の音のやうに〉 239 ~ 240 (34)

⑥ 〈光のうちとそとの歌〉 237 ~ 239 (33)

抽象化 || 誤謬

「過ぎゆく」

→ 抽象化

幼年時の「孤独」に「ありのまま」あう

← 後の「カンテラ」等への伏線

かくてわたしはいつも未来といふものが無いかのやうに街々の角を曲つたものである。ただ空洞のやうな個処へゆかうとしてゐるのだと自らに言ひきかせながら、誰もわたしに驚愕を強ひなかつたし、孤独は充分に認められてゐて余剰を思はせなかつた。其処此処に並んだ建築のあひだ、幼年の日の路上でわたしはいまや抽象された不安をもつて、自らの影に訣れねばならなかつた。

わたしの知らうとしたことは時計器にはかかはらない時間のむかふからやつてくるはずであつた。しかも視ることの出来ない形態で、決してわたしを露ほすやうにはやつてこないはずであつた。

わたしのころは乾いて風や光の移動すら感覚しようとはしなかつた。多彩ないるが流転する場処で、ころは渴えてたつたひとつの当為を索めてゐた。限らない生存の不幸をいやすために、わたしは何を感じなければならなかつたか。そしてわたしに感じさせるためにそれは何処からやつてこなければならなかつたか。わたしは徒らに時の流れをひき延すことで、わたしの渴えをまたひき延してきたにすぎなかつた。

既に物を解きあかす諸作を喪つてしまつたひとびとの群れに、わたしは秘かに加はらうとしてゐた。わたしの時はいつとも同じ形態で、同じ光や影の量でおとづれてきた。

わたしは自らの影を腐葉土のやうに埋れさせた。判ずる術もないがわたしの埋められた影はいまもそのまま且つての諸作で、光の集積層の底に横つてゐるだらう。記憶によつてではなく何か哀しみを帯びた諸作を繰返すごとに、わたしの埋れた影がまがふかたなくわたしの現在を決定するように思はれた……

わたしは決して幸せを含んだ思ひに遭遇ふとは考へてゐなかつたけれど、いつかわたしのころが物象に影響されなくなつた時、何もかも包摂したひとつの睡りに就き得るだらうと予感してゐた。

まったくわたしはこんな予感をあてにして生存してゐたとわたしを知らないひとびとは考へたかも知れない。わたしはあてでもあるかのやうに視えたにちがひないのだから、ほんたうにあてでもあるかのやうに急ぎ足で、あてでもあるかのやうに暗鬱であつたのだから。

〈わたしは酸えた日差しのしたで、ひとりのひとに遇はうとしてゐた〉

「空洞」のみの肯定
「自らの影」の否定

⑦ 〈午後〉
(102)
326 ~ 327

風や光の否定

あきらめ……？

⑧ 〈酸えた日差しのしたで〉
(103)
327 ~ 328

後悔……？

わたしは街々のうへにいつばい覆はれた暗い空にむかつてやがて自らのとほり路になるはずの空洞を索しもとめた。空洞はわたしの過剰と静寂とを決定するはずであつた。わたしには何よりもそれが必要であつたから。わたしはあふれ出る風の騒ぎや雲の動きを覚えようとしなかつた。季節はいまこころの何処を過ぎようとしてゐるのか。そして生存の高処で何がわたしに信号しようとしてゐるのか。わたしは知らうとはしなかつた。

長い時間わたしはどれほど沈黙のなかに自らの残された純潔を秘さうとしてきたか。しかもわたしはそれを秘しながらひとつの暗蔭な季節を過ぎてた。「きた」と信じてゐた。〈結局〉とわたしは考へる。わたしはむしろ生存の与件よりも虚無の与件をたづねてゐたのではなかつたか！ 且てわたしはわたしの精神のなかにある建築を使役することが出来なかつた。わたしはむしろ形態あるものの亡びてしまつたあとに、それを自らの記念碑として保存しようとするだけであつた。しかもそれを保存することで、わたしはわたしの生存に何を寄与しようとするのかわからなかつた。あるひはわたしの寄与しようとしたものが悪意のうちにかこまれて消え去つたといふことでわたしはひとびとに判らせることを諦めてしまつたのかも知れない。わたしの建築はそのときから与件のない空洞にすぎなくなつた。わたしはいまそれを暗い空にむかつて索さうとしてゐた。扶壁・窓々・円柱・むなく石材に刻まれた飾窓・まるで無人のすでに亡びさつた生存の象徴のやうに。としつきわたしは孤独とか寂寥とかひとびとが漠然と呼びならはしてゐるものの実体としてそれを守つてきたのではなかつたか。

つひに何の主題もない生存へわたしを追ひこんだものすべてをわたしはわたしの精神のなかにある建築に負はせた。ひとびとはいつか巨大な建築のふとした窓の間に赤錆びた風抜きを見つけ出すだらう。

わたしはわたし沈黙が通ふみちを長い長い間索してゐた。

わたしは荒涼とした共通を探してゐた。

⑨ 〈死霊のうた〉
(104)
空洞を索す
328 ~ 330

虚無の与件

与件のない空洞を索す

使役

わたしの精神のなかにある建築に負はせた

《追憶》によつて現在を忘却に導かうとすることは衰弱した魂のやりがちのこ
とであつた **わたし**は砂礫の山積みされた海べで 〈どこから どこから
おれはきたか〉といふ歌曲の一節によつてわたしのうち克ち難い苦悩の来歴
をたしかめようとしたのだ むしろたしかめるといふよりも歌曲のもつてゐ
る時間のなかにまぎれこもうとしたのだ

砂礫の山積みはたしか築岸工事に用ひるためのものであつたらう あたりに
人影もなく 赤い工事前のカンテラがほうりなげてあつた…… 〈昔は！〉と**わ**
たしは思つたものだ 昔はどうにもあつかひかねる情感の過剰のためによく
この海べをおとづれたものがと…… ああ 〈昔は！〉といふことばがどん
なにみすばらしいものであるかを考へるとわたしは羞耻を覚えざるを得ない
のだ **わたし**の魂の衰弱にむかつて またいまはいくらか狡猾さによつて無
感覚になつてゐるわたしのこころに対して……

わたしはその頃 わが家のまへのアスファルト路が夏になると溶けてしまふ
のを視てゐたものだ そうして貨物自動車を通つた跡には歯型のやうなタイ
ヤの痕跡が深く食ひこんでそれからしばらく経つた頃 道路工夫が白と黒の
わく木を立てて補修にやつてきた 彼等がわたしの追憶に残していつたもの
はやはり赤いカンテラなのだ……

わたしは知つてゐる それから以後何処と何処で赤いカンテラに出遇つた
か！ そうして不思議なことにその赤いカンテラの形態も道路工夫たちの
衣服も 〈若しかするとその貌も〉少しも變つてゐないことであつた そうして
彼等のツルハシの一打ちがほんの少ししかアスファルトをえぐらないことも
まつたくおなじであつた

何といふ記憶！ 固定されてしまつた記憶はまがふかたなく現在の苦悩の形
態の象徴に外ならないことを知つたとき **わたし**は別にいまある場所を逃れ
ようとは思はなくなつたのである

且て**わたし**にとつて**孤独**といふのはひとびとへの善意とそれを逆行させよう
とする反作用との別名に外ならなかつた けれど**わたし**は自らの隔離を自明
の前提として生存の条件を考へるように習はされた だから孤独とは喜怒哀
樂のやうな言はばにんげんの一次感覚の喪失のうへに成立つ**わたし**自らの生
存そのものに外ならなかつた

おう ここに至つてわたしは何を惜むべきであらう

ただひとつ**わたし**自身の生理を守りながら暗い時圏が過ぎるのを待つのみで
あつた ひとびとはわたしがわたしの部屋にもあの時間の圏内にも何の痕跡
も残さなかつたといふことを注視するがいい

〈どこから どこから おれはきたか〉と
いふ歌曲

※「どこから」||ナンセンスな疑問

※「風」は過去から来た

鮎川によるカンテライメージの評価
吉本自身による消極的評価

あつかひかねる感情の過剰

固定されてしまつた記憶
||現在の苦悩の形態

善意↑反作用↓孤独||自らの隔離

=
喜怒哀楽

=
一次感覚

⑩ 〈暗い時圏〉 195 ~ 197
(4)

自らを嘔む蛇の嫌悪といふ言葉でいまはその思考を外らしてしまふより外ない 何故ならその時間の圏内でのわたしの思考はすでに生理のやうに収着して剥離しないものだから **ひとびとはわたし**の表現することのなかつた沈黙を感じ得ないとするならば 或は**わたしの**魂の惨苦を語りきかせることは無意味なのだ

そんなとき人間の形態**わたしの**形態はいつも極限の像で立ち現れた 魂は秘蹟をおほひつくしているとまことしやかに語る思想家たちに告げなければならぬ あたかも秘蹟を露出させるかのやうに明らかに発光する人間の極限の相**すがた**があることを こんなことを言つてゐるわたしを革命や善悪の歌で切断してはなるまい あたかも**ひとびと**が物を喰わざるを得ないようにその時わたしの孤独はたくさんの精霊を喰はざるを得なかつたのだから わたしは匂ひのない路上の無限を歩んだ 匂ひが時間の素質に外ならないと知つたとき**わたし**はこの路上の寂寥を誰とも交換することを願はなかつた

〈そうして自らが費した徒勞の時間をいつまでも重たく感じたことのために残された**わたし**の生存はひとつの影にすぎなくなつたのか！〉

長い生存の内側を逆行したときたとへ微小な出来ごと過ぎないとしても且て一度でも自らを自らの手で葬つたことのある者は ああ長い冬の物象をむかへるために 感覚を殺ぎ 哀歎を忘れ 幾重にも外殻をかぶつてしまつた**わたし**の魂の準備を決して嗤ふまい そうして**わたし**はあたかも何ごともし起らなかつたやうにはじめてひとつの屈折を曲つていつた この生存が限りなく長いことをわたしはひとつの美と感じなければならなかつた それは何といふ異様な美しさだつたらう はじめに水のやうに触感された生は **しだいに**屈折を加へていつた **わたし**は自らのうちに自らを計量しながらつまり完全に**覚醒**しながら歩まねばならなかつた

独りで凍えさうな空を視てみるといつも何処かへ還りたいとおもつた **ひと**びとが電灯のまはりに形成してゐる住家がきつとひとつ以上の不幸を秘してゐるものであるのを知つてゐたのでいづれかひとつの住家に還らうとは決して思はなかつた すると何処かへといふのは漠然とわたしの願望を象徴するものであつたらしい しかも願望の指さす不定をではなくまさしく願望そのものの不定を象徴するものであつた

わたしが了解してゐたのはただわたしのやうなものにもなほひとつの回帰についての願望が必要だといふことであつた 言ひかへればわたしの長い間歩むできた路上がやがて何処かへ還りつくといふことのある侘しげな感覚をわたしが宿命のやうに思ひなしてゐるといふことであつた 一体いつごろからわたしは還りゆく感覚を知りはじめたか しかもその感覚がわたしの生存にどのやうな与件を加へ得たか！

⑪ 〈寂しい路〉 255～256
(44)

ベルグソン『時間と自由』
私がばらの匂いを嗅ぐと、ただちに幼少期の混然とした思い出が私の記憶によみがえる。(以下省略)

× 匂いが思い出を喚起
○ 匂いは思い出を包摂している
路上の寂寥

⑫ 〈鎮魂歌〉 330～331

直線としての時間感覚の否定
「覚醒」

⑬ 〈過去と現在の歌〉 257～258
(46)

「回帰」という感覚と与件

〔わたし〕は過去と感じてゐるものが遠い小さな風景のやうに視えるといふこととで 歩んできた路の屈折の少いことを嘆くべきであらうか 誰もが過去を時間から成立つてゐる風景として考へざるを得ないといふことが どんなに

わたしたちの生存を単調なものに視せたか知れない〕

わたしが依然として望んでゐたことは 過去と感じてゐる時間軸の方向にひとつの切断を 言はば暗黒の領域を形成するといふことであつたらしい それゆゑわたしが何処かへ還りたいと思ふことのうちには わたし自らを埋没したい願望が含まれてゐなければならなかつた

あはれなことにわたしは最初わたしの生存をうち消すために無益な試みをしてきた その痕跡はわたしのうちに如何なることも形態に即してなされてはならないといふ確信を与へた その時からわたしの思考が限界を超えて歩みたいと願ひはじめたと言へる しかもひとびとが為してしまつたことをあらためて異様に為したことのため またひとびとが決して為さなかつたことをためらひもなく為したことのため わたしはたぐさんの傷手を感じなければならなかつた

「過去」は時間から成立する風景ではない

① 〈晩禱の歌〉 258～260
(47)

如何なることも形態に即してなされてはならない？

*
*
*

時刻がくると影の圏がしだいに光の圏を侵していった。そればかりか街々の路上や建築のうへで風の集積層が厚みを増してゆくのであった。**わたし**はただ自然のそのやうな作用を視てゐるだけでよかつたのかどうか。滑らかな建築の蔭にあつてわたしのなかを過ぎてゆく欠如があつた。

つぎつぎに降りそそいでくる光束は、寂かな重みを加へて。**わたし**はその底にありながら何か遠い過去のほうからの続きといつたような感覚に捉へられてゐた。しばしばわたしの歩む軌道の外で喧騒や色彩がふりまかれてゐたとしても。**わたし**は単光のうちがはを守つてきたのではなかつたか。とつぜんわたしには且ての日の悲しみや追憶のいたましさやむごたらしかつた孤独やらの暗示が、ひとつの匂ひのやうに通り返してゆくを感じなければならなかつた。おう、まさしく**わたし**がわたし自らの単純な軌道を祝福するため。現在は何びともしなくなつた微かな過去の出来ごとの追憶を追はねばならない。ひとびとが必要としなくなつた時。**わたし**はそのものを愛してきたのだから。この世の惨害にならされた眼はいつも悲しいわけではない。ただひとびとの幸せをふくんで語られる言葉にふと仮証を見つけ出すときだけ限りなく悲しく思はれた。

風と光と影の量をわたしは自らの獲てきた風景の三要素と考へてきたので。**わたし**の構成した思考の起点としていつもそれらの相対的な増減を用ひねばならないと思つた。それゆゑ時刻がくるとひとびとが追憶のうちに沈んでしまふ習性を、影の圏の増大や、光の集積層の厚みの増加や、風の乾燥にともなふ現在への執着の稀少化によつて説明してゐたのである。**わたし**自らにとつても追憶のうちにある孤独や悲しみはとりもなほさず**わたし**の存在の純化された象徴に外ならないと思はれた。

わたしは不思議といふ不思議に習はされてゐた。また解きあかすことも出来た。だから突然とか超絶とかいふ言ひ方でそれを告知されることを願はなかつた。ただ**わたし**たちは現在でも不思議といふことを**わたし**たちのこのころの内部で感ずることが出来た。そしてあの解きうるものにちがひない現象が、ここに与へた余剰といふものを不思議と呼び習はしてきた。

⑤ 〈寂かな光の集積層で〉 265〜266

(51)

よかつたのかどうか 後悔 《川本論》

「1」とは異なる時間の風景では？

光↑「風」↓影 (相対的)

光⇨抽象化を進める

影⇨共有時を生み出す

余剰⇨与件？

だから触覚のあるひとびとが空のしたですべての物象が削がれてみると感じ
たとしてもそれはその通りであった(けれど昨日と明日とがすでにわたしした
ちの生存のまはりに構成されて在ると知ったとき)そして昨日と明日とに何
か意味を付与することで生存の徴しとしたいと願ったとき(あきらかにそこ
に不思議といふ呼び名を与へねばならない何か)が現はれた(何故ならいたる
ところの空のしたで)わたしたちの生存は時を限定したいと感じてゐたに相
違ない(しまった時は決してわたしたちによつて限定されないものに思はれたか
ら)その限定にかけられたわたしたちの欲望がもしかしてわたしたちのこ
ろに余剰を呼び覚すかも知れなかつたから

わたしたちは自らの足が刻んでゆく領域さへ何らかの計量を加へることで限
定しようとした(そして奇怪なことにその結果が意想外であることを怖れる
やうにしてきた)誰もがこの生存の領域が単調である(事實は単調そのものな
のだが)ことを忌んだのだが(それも意想外のこと)が決して起こらないことを
前提としてゐるやうに思はれた

もはやわたしたちの空のしたには何もかも残されなくなことを悲しみなが
ら(しかもわたしたちはすべてのものを限定したい欲望のうへに生存を刻み
こんでいつた

わたしの時間のなかで孤独はいちばん小さな与件にすぎなかつた(わたしは
ひとびとに反して複雑な現在といふものの映像を抱いてあの過去を再現しよ
うと思つてゐた)それによつてわたしが自らのうちに加へたと感じてゐる複
雑さがどのやうな本質をもつものであるかを知りうるはずであつた

言ひかへるとわたしは自らの固有時といふものの恒数をあきらかにしたかつ
た(この恒数こそわたしの生存への最小与件に外ならないと思はれたし)そ
れによつてわたしは宿命の測度を知ることが出来る筈であつた(わたしは自
らの生存が何らかの目的に到達するための過程であるとは考へなかつたので
わたし自らの宿命は決して変革され得るものではないと信じてゐた)わたし
はただ何かを加へうるだけだ(しかもわたしは何かを加へるために生きてゐ
るのではなく)わたしの生存が過去と感じてゐる方向へ抗ふことで何かを加
へてゐるにちがひないと考へてゐた

かくしてわたしには現実とは無意識に生きる場であつた(時間とはそれに意
識的に抗ふ何ものかであつた)わたしは現実から獲取したもので何らか形あ
るものはすべて信じなかつた(わたしはただわたしの膨張を信じてゐただ
そうして膨張を確めるために忍耐つよく時間に抗はねばならなかつた

計量され限定され意想外のない世界

すべてのものを限定

光 風 影 (外界)

不思議・孤独(内面)の与件

自らの固有時といふものの恒数をあきらかに
にしたかつた

恒数||変更不可

関数への数字の代入||線を発生

わたしには現実とは無意識に生きる場であ
つた(時間とはそれに意識的に抗ふ何もの
かであつた)

（ああ いつかわたしはこの忍耐を放棄するだらう）

そのときわたしは愛よりもむしろ寛容によつてわたし自らの睡りを赦すであらう）

忍耐の放棄？

こころは限りなく乾くことを願つた 極度に高く退いた空の相から わたしはわたしの宿命の時刻を選択した 風の感覚と建築に差し込む光とそれが構成してゐる影がいちやうに乾き切つてゐることで わたしは充されてしまつた わたしのこのうへなく愛したものは風景の視線ではなく 風景を間接的にさへしてしまふ乾いた感覚だつたから 果てしなくゆく路上でやはり風と光と影だけを感じた

16 〈風と光と影の歌〉 263〜264

(50)

わたしを時折苦しめたことはわたしの生存がどのやうな純度の感覚に支配されてゐるかと言ふことであつた 言いかへるとわたしはわたし自らが感じてゐる風と光と影とを計量したかつたのだ 風の量が過剰にわたるときわたしは宿命はどうであるか 光の量に相反する影の量がわたしのアムールをどれだけ支配するだらうかと 言はばわたしにとつてわたしの生存を規定したい欲望が極度であつた

わたしをとりまいてゐる風景の量がすべてわたしの生存にとつて必要でないならば いや その風景の幾分かを間引きすることが不都合でないならば

挫折感覚？

わたし自らの視界を殺すことによつてそれを為すべきであつた しかもわたしはより少く視ることがより多く感ずることであるならばそれを為すべきであつた わたしは感ずる者であることがわたしのすべてを形造ることに役立つてきたと考へてゐたから

わたしは風と光と影との感覚によつてひとびとのすべての想ひを分類することも出来たであらう 且ての日画家たちが視覚のうちに自らを殺して悔ひなかつたやうに わたしは風と光と影との感覚のうちにわたしの魂を殺して悔ひることがなかつた わたしの生存にはゆるされたことがたつたひとつ存在してゐた

ゆるされたことがたつたひとつ

時間？

ひとびとはあらゆる場所を占めてゐた そして境界は彼等のアイデアによつて明らかに引かれていた 若しかしてわたしの占める場所が無かつたとしたら わたしはこの生存からおはねばならなかつたらうか

17 〈規制された時のなかで〉 261〜263

(49)

〈投射してくる真昼間の光束よ〉

〈わたしはわたしを素めてゐるのにあの類がみつからないといふことのためにそれらを理由もなく喪はなければならなかつたのか！〉

否！ まつたくそれは理由のないことに思はれる。若し場処を占めることが出来なければ **わたし** は時間を占めるだらう。幸ひなことに時間は **類** によつて占めることはできない。つまり面をもつことができない。 **わたし** は見出すだらう。すべての境界があえなく崩れてしまふやうな生存の場処に **わたし** が生存してゐることを。其処で **わたし** は夢みることも哀愁に誘はれて立ち去ることも。また **ひとびと** によつて繋れることもない。刻々と **わたし** は確かに歩み去るだけだ。

若しも **わたし** が疲労した果てに **わたし** 自らの使命を告げること **ひとびと** が赦してくれるならば…… それを語るだらう。すべての規画されたものによつて **ひとびと** **わたし** 自らも罰することをしないことだ！

わたし は限界を超えて感ずるだらう。視えない不幸を視るだらう。けれど **わたし** は知らない。わたしは **やがて** のやうな形態を自らの感じたものに与へるか。あの太古の石切り工たちが繰り返した手つきで **わたし** は限りなく働くだらう。

わたし たちの行手を決定してゐたものは且て **わたし** たちのうちにあつた。けれど最早。暗い時間だけがまるで生物の死を見定めるように **わたし** を視てゐるだけであつた。

〈時間よ〉 **わたし** がそれになんげんの形態を賦与しようと願つてきた時間よ。 **わたし** はその条件を充すために。自らを独りで歩ませなければならぬであらう。 **わたし** は習慣性に心情を狂されることで間接的に現実の危機を感ずしてゐた。 **わたし** は現実の風景に対する **わたし** の精神が存在してゐないことを。どんなに愕いたことか。 **わたし** の不在な現実が確かに存在してゐる。

わたし はほんたうは怖ろしかったのだ。世界のどこかに **わたし** を拒絶する風景が在るのではないか。 **わたし** の拒絶する風景があるやうに……といふことが。そうして様々な精神の段階に生存してゐる者が。決して自らの孤立をひとに解らせようとしなことが如何にも異様に感じられた。 **わたし** は昔ながらの。しかも **わたし** だけに見知られた時間のなかを。この季節にたどりついていた。

人々||場所
わたし||時間

歩み去る (Z軸)

やがて

⑬ 〈蒼馬のやうな雲〉 331〜332
(106)

⑭ 〈一九五〇年秋〉 260〜261
(48)

「この季節」||原詩での「秋」からの変更があつた

とつぜんあらゆるものは意味をやめる あらゆるものは病んだ空の赤い雲のやうにあきらかに自らを耻しめて浮動する **わたし**はこれを寂寥と名づけて生存の断層のごとく思つてきた **わたし**が時間の意味を知りはじめてから幾年になるか **わたし**のなかに とつぜん停止するものがある

〈愛するひとたちよ〉

わたしこそすべてのひとびとのうちもつとも寂寥の底にあつたものだ いま

わたしの頭冠にあらゆる名称をつけることをやめよ

わたしは知つてゐる 何ごとか **わたし**の卑んできたことを時はひとびとの手をかりて致さうとしてゐる もつとも陥落に充ちた路を骸骨のやうに瘦せた流人に歩行させ 自らはあざ唾はうとしてゐる時間よ **わたし**は明らかにおまへの企みに遠ざかり ひとりして寂寥の場処を占める **わたし**の夕べには依然として病んだ空の赤い雲がある **わたし**は知つてゐる **わたし**のうちこ不安が不幸の形態として存在してゐることを

〈愛するひとたちよ〉

わたしが自らの開ぢられた寂寥を時のほうへ投げつけるとき **わたし**を愛することをやめてしまふのか **わたし**の寂寥がもはやいつも不安に侵されねばならなかつたとき **おまへ**は **わたし**の影を遠ざからうとするのか **わたし**の不安のなかにおまへの優しさは映らなかつた すでに陥落に充ちたむごたらしい時が **わたし**のすべてをうばつてゐた

明らかに **わたし**の寂寥は **わたし**の魂のかかはらない場処に移動しようとしてゐた **わたし**はげしく瞋らねばならない理由を寂寥の形態で感じていた

少数の醜者のための註

(前略) ぼくは時がぼくに与へてくれるにちがひないと信じてゐたほとんどすべてを与えられなかつたが、ぼくが自ら猿得しようとして計丑したことの幾らかは獲取し得たと憎しられた。少数の読者がこの無償をモノログめいた時間との対話のなかにあるたったひとつの客観的な意味——つまり詩のなかに導入された批評または批評のなかに導入された詩——を感知してくれるならば、ぼくは小さな光栄をこの作品に賦与し得たことになるだらう。そして日本現代詩の方法的不遇の一形態に則して歩むことを必然の課題として強ひられねばならなかつたぼくの精神はその光栄を無二のことと感ずるに相違ない。

ぼくはいつも批評家を自らの胎内にもつた詩人を尊重してきたのだ。

ぼくの〈固有時との対話〉が如何にして〈歴史的現実との対話〉のほうへ移行したかは、この作品につづく〈転位〉によつて明らかにされなければならぬ。ここではただ一九五〇年においてぼくは精神の内閉的な危機において現実の危機を写像しつゝあつたことを註しておきたいと思ふ。

一九五二年五月作者

第五セクション

とつぜん停止するものがある

円環構造？

街々の建築のかけで風はとつぜん生理のやうにおちていつた

赤い雲 秋？

はげしく瞋らねばならない理由

①火の秋の物語 (P. 211L. 3~P. 213L. 10)

あるユウラシヤ人に

ユウジン その未知なひと

いまは秋でもくらくもえてゐる風景がある

きみのむねの鼓動がそれをしつてゐるであらうとしんずる根拠がある

きみは靡人の眼をしてユウラシヤの文明をよこぎる

きみはいたるところで銃床を土につけてたちどまる

きみは敗れさるかもしれない兵士たちのひとりだ

じつにきみのあしおとは昏いではないか

きみのせおつてゐる風景は苛酷ではないか

空をよぎるのは候鳥のたぐひではない

舗路(ペイヴメント)をあゆむのはにんげんばかりではない

ユウジン きみはソドムの地の最後のひととして

あらゆる風景をみつづけなければならぬ

そしてゴモラの地の不幸を記憶しなければならぬ

きみの眼がみたものをきみの女にうませねばならない

それはくらい告知でわたしを傷つけるであらう

告知はそれをうけとる者のかはからいつも無限の重荷である

この重荷をすてさるために

くろずんだ運河のほとりや

かつこうのわるいビルディングのうら路を

わたしがあゆんでゐると仮定せよ

その季節は秋である

くらくもえてゐる風景のなかにきた秋である

わたしは愛のかけらすらなくしてしまった

それでもやはり左右の足を交互にふんであゆまねばならないか

ユウジン きみはこたえよ

こう廃した土地で悲惨な死をうけとるまへにきみはこたへよ

世界はやがておろかな賭けごとのはつた賭博場のやうに

焼けただれてしづかになる

きみはおろかであると信じたことのために死ぬであらう

きみの眼はちひさないばらにひつかかつてかはく

きみの眼は太陽とそのひかりを拒否しつづける

きみの眼はけつして眠らない

ユウジン これはわたしの火の秋の物語である

(靡人)(連帯)(現在)の三角形

「火の秋の物語」等位置「審判」

②分裂病者(P. 213L. 11~P. 216L. 14)

不安な季節が秋になる

そうしてきみのもうひとりのきみはけつしてかへつてこない

きみははやく錯覚からさめよ

きみはまだきみが女の愛をうしなつたのだとおもつてゐる

おう きみの喪失の感覚は

全世界的なものだ

きみはそのちひさな腕でひとりの女をではなく

ほんたうは屈辱にしづんだ風景を抱くことができるか

きみは火山のやうに噴きだす全世界の革命と

それをとりまくおもたい気圧や温度を

ひとつの加担のうちにとらへることができるか

きみのもうひとりのきみはけつしてかへつてこない

かれはきみからもち逃げした

日づけのついた擬牧歌のノートと

女たちの愛やさしさと

睡ることの安息と

秩序や神にたいする是認のこころと

狡猾なからくりのおもしろさと

ひものついた安楽と

ほとんど過去の記憶のぜんぶを

なじめなくなつたきみの風景が秋になる

きみはアジアのはてのわいせつな都会で

ほとんどあらゆる屈辱の花が女たちの欲望のあひだからひらき

街路をあゆむのを幻影のやうにみてゐる

きみは妄想と孤独とが被害となつておとづれるのをしつてゐる

きみの葬列がまへとうしろからやつてくるのを感じる

きみは靡人の眼で

どんな憎悪のメトロポオルを散策する

きみはちひさな恢復とちひさな信頼をひつようとしてゐると

医師どもが告げるとしても

信じなくていい

きみの喪失の感覚は

全世界的なものだ

にんげんのおほきな雪崩にのつてやがて冬がくる

きみの救済と治癒とはそれをささえることにかかつてゐる

きみのもうひとりのきみはけつしてかへつてこない

きみはかれが衝げき器のヴォルテイジによつてかへると信ずるか
おう それを信じまい

きみの落下ときみの内閉とは全世界なものだ

不安な秋を不安な小鳥たちがわたる

小鳥たちの無言はきみの無言をうつしてゐる

小鳥たちが凄惨な空にちらばるとき

きみの精神も凄惨な未来へちらばる

あはれな不安な季節め

きみが患者としてあゆむ地球は

アジアのはてに牢獄と風てん病院をこしらへてゐる

アジア + ヨーロッパ || 世界

③黙契 (P. 217L. 1~P. 220L. 10)

おまへのちひさな敗北は

塵芥をながしてゐるうすくらしい晨の運河べりで

生活の窮乏や愛のあせた女の背信を

一瞬の泥水のやうにのみくだし

みじめな浮浪人のころになる

たつたそれだけのことだ

けれどおまへは傷つくにちがひない

それがおまへやおまへの晨をいつそうくらくする

それがおまへの反逆の根つこになりうる

それが絶望の種子をいたるところにうる

そんな暗いにんげんのころに

そうしておまへがにんげんにたいして感じてゐるみじめさはほ
んたうだ

あらゆる正義や反逆の根つこが

あまりたしかでないといふことで

おまへの感じてゐる疑惑や傷手はほんたうだ

地球といふこのおほきな舞台で

富や安定が正義をつくりあげる

ちひさな屈辱がおほきな反抗にかはる

その手品はそれぞれ正当に存在してゐる

けれど手品師はけつしてじぶんの仕掛けに傷ついてみない

おまへは考へることをやめるな

ほとんどあらゆる正義のうつくしさが

公準から見はなされてひさしいといふこと

わたしやおまへがひとつの幸せから遠ざかるとき

幸せのはうもわたしやおまへから遠ざかる意志をもつてゐること

絶対とか神とか

一瞬を永遠にすりかへようとする手品にすぎず

手品師の悲哀や絶望や貧慾が

そのからくりをささへてゐるのだといふこと

おう だから

おまへもわたしもあまり巧妙でない手品師のひとりだ

そうしてじぶんの演ずる仕掛けについて

卑怯なパントマイムの俳優の仲間だ

うしろめたい謎がいつも生存の断崖でうかがつてゐる

にんげんの黙契が醜怪な貌が

あらゆる風景のうしろがはにゐる

おまへがおまへのちひさな敗北につまづく晨

わたしはコムプレックスを病んでゐる

それがわたしたちの屈辱の季節といふものだ

どこにもあまりたしかな理由はないとかんがへるおまへと

どこにも備する苦悩はないとしんずるわたしと

とにかくうすくらしい飢餓のなから

それぞれの反抗を結びつけて

あゆみはじめねばならない

おまへはおおまへのちひさな敗北を

どこかの女たちの畑のなかに排せつする

するとまるでおまへの敗北に歪んだやうな

たんぽぽや董の花がひらく

おまへはその一九五〇年代の春をたいせつにしなければならぬ

わたしはあらゆる黙契ほじくりかへす

地殻とりまいてゐる霧のやうなふんぬきはがしてあるく

おう そしてほとんどたしかに

おまへがいちれつの屈辱の花を育ててゐる

そんな風景がいつしよに露出してくる

④絶望から希望へ(P.220L.11～P.223L.16)

ぼくたちは肉体をなくして意志だけで生きてゐる
ぼくたちは亡霊として十一月の墓地からでてくる
ぼくたちの空は遠くまで無言だ
ぼくたちの空は遠くまで無言だ
うたふことのできないぼくたちの秋よ
うたふことを変へてゆくぼくたちのこのころよ
ぼくたちが生きてゐることだけでぼくたちの同胞はくらい
ぼくたちが死なないことだけでぼくたちの地球は絶望的な場処だ
そうしてぼくたちは生きてゐる理由をなくしてゐることだけで
同胞と運命をつないでゐる

ぼくたちは愛をうしなつたときぼくたちの肉体をうしなつた
ぼくたちが近親憎悪を感じたとき
同胞はぼくたちの肉体を墓地に埋めた
おう いちまいの風だけが

ぼくたちの肉体は風と相姦する
ふごのやうに

からすの啼きかはす墓地から
ぼくたちの亡霊となつてでてくる
ぼくたちの衣裳は苛酷にかはつてゐる
ぼくたちの視る風景はくろずんでゐる

屈辱のはんぶんはぼくたちの土地から生れてそこにある
屈辱のあとのはんぶんはダビデの子から遺伝してそこにある
ぼくたちはいまもむかしのやうに労働を強ひられ
鎖をたちきるために反逆をかくまつてゐる

ぼくたちの空はやがて語りはじめ
ぼくたちの空のしたはやがて抗争するだらう
ぼくたちの都市は波うち際までせまり
ぼくたちの工場地帯は海にむかつて炭煙をはき出す
そうして生きてきたことがぼくたちを変へなかつたやうに
海はその色と運搬をつづける

ぼくたちの屈辱はみのり はじけ 枯れる
つきにぼくたちはあかるい街々で死ぬだらう
おう 未来のむげん都市と生産地帯から
ぼくたちの屈辱とぼくたちの絶望は発掘されるか
そのときあかるさがにんげんを変へ
ぼくたちの遺伝子はぼくたちの屈辱を忘れる

ぼくたちの絶望は意味を拒絶される
反逆と加担とのちがひによつて

ぼくたちの屍はむちうたれるだらう
ふたたび死のちかくにゐる季節よ

ぼくたちの分離性の意志が塵埃にまみれて生きてゐる
労働は無言であり刑罰である
未来のことがなにひとつ視えないとき

ぼくたちの労働はしひられた墓堀りである
ぼくたちの疲労のほかにぼくたちをたしかめる手段はない
苛酷はまるで呼吸のやうに切迫する
遠くまで世界はぼくたちを檻禁してゐる

⑤その秋のため(P.224L.1～P.227L.4)

まるい空がきれいに澄んでゐる
鳥が散弾のやうにぼくのはうへ落下し
いく粒かの不安にかはる

ぼくは拒絶された思想となつて
この澄んだ空を掻き撩きう
同胞はまだ生活の苦しきのためぼくを容れない
そうしてふたつの腕でわりのあはない困窮をうけとめてゐる
もしもぼくおとづれてゆけば

異邦の禁制の思想のやうにものおぢしてむかへる
まるで猥画をとり出すときのやうにして

ぼくはなぜぼくの思想をひろげてみせねばならないか
ぼくのあいする同胞とそのみじめな忍徒の遺伝よ
きみたちはいつばいの抹茶をぼくに施せ

ぼくはいくらかのせんべいをふところからとり出し
無言のまま聴かうではないか

この不安な秋がぼくたちに響かせるすべての音を
きみたちはからになつた食器のちあふ音をきく
ぼくはいまも廻転してゐる重たい地球のとどろきをきく
それからぼくたちは訣れよう

ぼくたちのあひだは無事だつたのだ
そうしてぼくはいたるところで拒絶されたとおなじだ
破局のまへの苦しさがどんなにぼくを結びつけたとしても
ぼくたちの離散はおほく利害に依存してゐる

不安な秋のすきま風がぼくのころをとほりぬける
ぼくは腕と足をうごかして糧をかせぐ
ぼくのころと肉体の消耗所は

とりもなほさず秩序の生産工場だ

この仕事場からみえるあらゆる風と炭煙のゆくへはほとんど**ぼく**を不可解な不安のはうへつれてゆく
ここからはにんげんの地平線がみえない
ビルディングやショーウキンドがみえない
おう しかも**ぼく**はなにも夢みはしない

ぼくを気やすい隣人とかんがへてゐる働き人よ

ぼくはきみたちに近親憎悪を感じてゐるのだ

ぼくは秩序の敵であるとおなじにきみたちの敵だ

きみたちは**ぼく**の抗争にうすら嗤ひをむくい

疲労したものの腰でドラム罐をころがしてゐる

きみたちの家庭で**ぼく**は馬鹿の標本になり

ピンで留められる

ぼくはきみたちの標本箱のなかで死ぬわけにはいかない

ぼくは同胞のあひだで苦しい孤立をつづける

ぼくのあいする同胞とそのまま忍従の遺伝よ

ぼくを温愛でねむらせようとしても無駄だ

きみたちのすべてに肯定をもとめても無駄だ

ぼくは拒絶された思想としてその意味のために生きよう

うすくらしい秩序の階段を底までくぐる

刑罰がはるところで**ぼく**は睡る

破局の予兆がきつと**ぼく**を起しにくるから

◎ちひさな群への挨拶(P.227L.5~P.230L.15)

あたたかい風とあたたかい家とはたいせつだ

冬は背中から**ぼく**をこえさせるから

冬は真むかうへでてゆくために

ぼくはちひさな微温をたちきる

をはりのない鎖 そのなかのひとつひとつの貌をわすれる

ぼくが街路へほうりだされたために

地球の脳髓は弛緩してしまふ

ぼくの苦しみをいたことを繁殖させないために

冬は女たちを遠ざける

ぼくは何処までゆかうとも

第四級の風てん病院をでられない

ちひさなやさしい群よ

昨日までかなしかつた

昨日までうれしかつたひとびとよ

冬はふたつの極から**ぼく**たちを締めあげる

そうしてまだ生れない**ぼく**たちの子供をけつして生れないやう

にする

こわれやすい神経をもつた**ぼく**の仲間よ

フロストの皮膜のしたで睡れ

そのあひだに**ぼく**は立去らう

ぼくたちの味方は破れ

戦火が乾いた風につてやつてきさうだから

ちひさなやさしい群よ

苛酷なゆめとやさしいゆめが断ちきれるとき

ぼくは何をしたらう

ぼくの脳髓はおもたく **ぼく**の肩は疲れてゐるから

記憶といふ記憶はうちやらなくてはいけない

みんなのやさしさといつしよに

ぼくはでてゆく

冬の圧力の真むかうへ

ひとりつきりで耐えられないから

たくさんのひとと手をつなぐといふのは嘘だから

ひとりつきりで抗争できないから

たくさんのひとと手をつなぐといふのは卑怯だから

ぼくはでてゆく

すべての時刻がむかうかほに加担しても

ぼくたちがしはらつたものを

ずつと以前のぶんまでとりかへすために

すでにいらなくなつたものはそれを思ひしらせるために

ちひさなやさしい群よ

みんなは思ひ出のひとつだ

ぼくはでてゆく

嫌悪のひとつひとつに出遇ふために

ぼくはでてゆく

無数の敵のどまん中へ

ぼくは疲れてゐる

が**ぼく**の瞋りは無尽蔵だ

ぼくの孤独はほとんど極限リミットに耐えられる

ぼくの肉体はほとんど苛酷に耐えられる

ぼくがたふれたらひとつの直接性がたふれる

もたれあふことをきらつた反抗がたふれる

ぼくがたふれたら同胞は**ぼく**の屍体を

湿つた忍従の穴へ埋めるにきまつてゐる

ぼくがたふれたら収奪者は勢ひをもりかへす

だから ちひさなやさしい群よ

みんなのひとつひとつの貌よ
さやうなら

⑦ 魔人の歌 (P. 231L. 1~P. 232L. 10)

ぼくのころは板のうへで晚餐をとるのがむつかしい 夕ぐれ
時の街で ぼくの考へてゐることが何であるかを知るために
全世界は休止せよ ぼくの休暇はもう数刻ではる ぼくはそ
れを考へてゐる 明日は不眠のまま労働にでかける ぼくはぼ
くのころがゐないあひだに 世界のほうぼうで起ることがゆ
るせないのだ だから夜はほとんど眠らない 眠るものたちは
赦すものたちだ 神はそんな者たちを愛撫する そして愛撫す
るものはひよつとすると神ばかりではない きみの女も雇主も
破局をこのまないものは 神経にいづらかの慈悲を垂れるにち
がひない 幸せはそんなところにある ところが
じぶんを無惨と思はないで生きえたか ぼくはいまもごうまん
な魔人であるから ぼくの眼はぼくのころのなかにおちこみ
そこで不眠をうったえる 生活は苦くなるばかりだが ぼく
はまだとく名の背信者である ぼくが真実を口にする ほと
んど全世界を凍らせるだらうといふ妄想によつて ぼくは魔人
であるさうだ おうこの夕ぐれ時の街の風景は 無数の休暇で
たてこんである 街は喧噪と無関心によつて ぼくの友である
苦悩の広場はぼくがひとりで地ならしをして ちようどぼく
がはいるにふさはしいビルディングを建てよう 大工と大工の
子の神話はいらぬ 不毛の国の花々 ぼくの愛した女たち

お訣れだ

ぼくの足どりはたしかで 銀行のうら路 よこれた運河のほと
りを散策する ぼくは秩序の密室をしつてゐるのに 沈黙をまも
つてゐるものがゆづりえびである患者ださうだ ようするに
ぼくをおそれるものは ぼくから去るがいい 生まれてきたこ
とが刑罰であるぼくの仲間だ ぼくの好きな奴は三人はある
刑罰は重いが どうやら不可抗の控訴をすすめるための 休暇
はかせげる

⑧ 死者へ瀕死者が (P. 232L. 11~P. 235L. 16)

広場と濛ばたと街路で
銃眼に射ぬかれた死者よ
風のやうにまきあがつた塵埃につつまれて屍をよこたへた
死者よ

腐敗した都会の五月の風とおほきなフィナンツの生きた手足が

いつものはれあがつた空のしたできみたちを死におくつたので
ある

きみたちは死霊となつて

いまも街角で視ることができぬ

貨車(ワゴン)のうへの装甲車や砲が

なんの礼儀もなく疾走してゆくのを

またをはることのない群衆の帽子が

ひとつひとつビルディングのなかに消えてゆくのを

またそのとき教会堂の鐘が鳴り

天候旗が

晴ときどき曇りの信号をあげてゐるのを

大戦のあとでじぶんの意志をつくりあげ

女たちの愛のかはりに 反逆の思想をえらんだ

ゆめは迅速で

非議はするどく

なげなし微温をつきやぶつて

きみたちはいつてしまつた

いまも秩序のおとしあなのあひだで

きみたちは永遠に抗争する者だ

うす汚れた風がきみたちの霊を訪問する

そのあとからちんばをひいたぼくが思想がおとづれる

きみたちの霊を眠らせないために

いまもぼくたちの都会は奴隷的で

理由もなく飢えるものと

インフエリオリテイ・コムプレックスを病むものと

分裂的愛情にからみあふものと

あらゆる偽、まん、のうへで

戦争をチャヤンスのようにかがふものが

あひかはらずはき、溜めのやうに生きてゐる

おう そしてぼくは

瀕死者であるのに死者たちの安息をもたない

奴隷的な街の腰あたりで

運河が汚物をうかべてゐる

銀行が蟲様突起のやうに

ひとびとの祕された惨苦をつきさしてゐる

あらゆるものへの訣別を

脳髓が示唆するときでも

ぼくの不幸は風景に鎖のやうにつながれてゐる

めをさせ 死者たちよ

きみたちの憤死はいまもそのままぼくの憤死だ (以下略)

崩れかかった世界のあつちこちの窓わくから
薄あをい空を視てゐる

円けいの荷重を感じてゐる むすうの
にんげんの眼

信ずることにおいて過剰でありすぎたのか

ぼくの眼に訣別がくる

にんげんの秩序と愛への むすうの

訣別がくる

(中略)

訣別はどこにはじまつたのか

どこにかたちをあらはしたのか

そのとき五月の空は鮮やかに ビルディングのうへで

血と蒙塵と湿つた風とを噴きあげ ぼくは

みづからに赦さうとした愛の惰性を憎んだ

萌えでる五月の街路樹よ

陰えいを匂ひでわかる微かな風よ

屈折したペイヴメントのうへでぼくの予感が視る

箱詰めにあつたぼくの死とぼくの生とを

埋もれてゆくにんげんとにんげんの苦悩とを

生きのこるものとその寂しげな象徴とを

もしぼくたちが機械のひとつであるとしぶんを考へうれば

ぼくたちの文明はしごく平安なのだ

銀行の扉がひらき 有価証券の額面が四散する

フィナンツカピタリズムの再生と膨張

ぼくにあたへられたふたつの眼が

たしかに視るべきものを視てゐる

鉄鎖をたち切らうとする五月よ

煤けた花々のさく季節よ

美しいことになかつたぼくたちの時代の言葉で

折や呪咀をとなへることをやめよう

季節はふたいろの風から

ちひさな夕星を生んでゐる

ぼくのしらないひとたちがアジアのどこかで

銃床と星とを繋ぎあはせる

あの伝承の地平線で

非道の殺戮をはびこらせるな

ぼくはそれをかながへるとき
疾走するかげのやうに ひとびとの言葉のなかで語らうとする
のだ

〈夕べがひとびとの頭のうへでひらく

睡りがおちてきさうに空が咽つてゐる

哀れな地球ではいつせいに晚餐がはじめられる

黄色なひかりに埋もれて ぼくはひとつの仮定をたてる

明日ぼくのうへにやつてくる荒涼とその救済について

たれかのために唱ふだらう ぼくのちひさな歌について

荒廃した未来へあゆみよる ぼくのわづかな歩行について

それはしづかな怯懦でもあるのか

ぼくは死に ぼくの優しさがそれをかながへてゐる

とぢられたぼくの眼は永遠を約束されないけれど

むすうの星がぼくの精神のゐないあひだに生れ

ぼくのゐないあひだに薄れる

それだけがぼくの夕べと夜との説話だ

ゆるされた明るい可能だ〉

絶望がむかふからかたたい気圏をこしらへてくる

ぼくのとほい友たちは銃口を擬して

時刻をまもつてゐる

をはることのない暗憎をぼくはかれらのために憎む

未来と過去とを鎖のやうにつないである歴史を憎む

重荷がぼくたちの肩から 未来の肩にうつされる

そのときのぼくたちの安堵を憎む

鉄鎖のなかにきた五月よ

ちがつた方向からしづかな風をよこしてゐる五月よ

ぼくは強ひられた路上に ぼくの影があゆむのを知つてゐる

星のうた 落下のうた 夕べの風のうた

ぼくはぼくの仲間たちに何を告げよう

かれらのゆく路にかれらの草が騒いでゐる

希望をとりかへにぼくをおとづれようとするな

いつもある者は死にあるものは生きてゐる

つまりいつさいの狡智の繁榮するところで

さびしげなことをしようとするな

鉄鎖につながれた五月よ

苛酷がきざみこまれた路のうへに

九月の病んだ太陽がうつる

蟻のやうにちひさなぼくたちの嫌悪が

あなぐらのそこに這ひこんでゆく

黄昏れのはうへ 　むすうのあなぐらのはうへ

ぼくたちの危惧とぼくたちの破局のはうへ

太陽は落ちてゆくように視える

はじめにぼくたちの路上が 　羞耻が 　ちひさな愛が

つぎにぼくたちの意志が

かげになる

ぼくたちのさてつした魂は役割ををへる

あの悔恨に肉づけすることにつかひ果したところを

あなぐらのそこに埋没させようとする

しづかに睡るのかあきらかに死ぬのか知らない

ぼくたちの根拠はしだいに荒廢し

ぼくたちの愛と非議と抗争とはみしらぬ星のしたに繋がれる

おう 　ぼくたちの牢獄

風が温度と気圧とをかへ

戦火と乾いた夜が風景とその視線をかへ

ぼくたちの不幸な感情が女たちのところをかへ

夕べごとに板のうへで晚餐がひらかれる

いつせいに寂しいぼくたちの地球よ

ぼくたちはいんめつされた証拠のために

盗賊と殺人者の罪状を負はなければならぬ

いんめつされた証拠を書きあらためるため

ぼくたちの不在をひつようとするものがゐる

そこに奪はれたものと奪はれないものとを

空しくわけようとするぼくたちの眼が繋がれてゐる

ぼくたちは九月の地球を愛するか

おう 　ぼくたちはそれを愛する

ぼくたちは砲火と貨車(ワゴン)のうへの装甲車をこのむか

おう 　ぼくたちはそれをこのまない

ぼくたちは記憶と屈辱とになれることができるか

おう 　ぼくたちはそれになれることができない

ゆくとところのないぼくたちの信号よ

とまどふひとびとの優しいところよ

ぼくたちの路上はいまも見なれてゐてしかも未知だ

どんな可能もぼくたちの視てゐる風景のほかからやつてこない
どんな可能もぼくたちの生を絶ちきることなしにおとづれるこ
とはない

ぼくたちはそこで刺し殺さねばならぬ

架空のうたと架空の謀議と

たしかなぼくたちの破局とを

ぼくたちはそこで嗤はねばならぬ

フィナンツの焦慮とその行方とを

おう 　さびしいぼくたちの法廷

九月の太陽は無言だ

まるでぼくたちの無言のやうに

すべての小鳥たち 　すべての空のいろも無言だ

ぼくたちはぼくたちの病理を言葉にかへない

ぼくたちはぼくたちの病理を審理にゆだねる

なぜ 　美しいものと醜いものとがわけられないか

なぜ 　未来の条件のまへに現在を捨てきれないか

なぜ 　愛憎をコムプレックスによつておしつぶすか

なぜ 　本能に荒涼たるくびきをかけるか

おう 　その威厳と法服とを歴史のたどられたプロセスからかり

るだらう

ぼくたちの法定者よ

ぼくたちを裁くために嗤ふべき立法によるな

ぼくたちを裁くためにけちくさい倫理をもちひるな

ぼくたちはじぶんの無力に伝播性がなく

いつもひとりで窓をこじあけ

九月の空と太陽をみようとすることを知つてゐる

習慣以上のとがつた仕種で

世界のあらゆる異質の思想をののしらうとかまへてゐる

ぼくたちの苛酷な夢のはやさを知つてゐる

ぼくたちのところはうけいれられないとき

小鳥のやうなはやさでとび去り

そのときぼくたちをとりまいてゐる微温を

つき破つてしまふのを知つてゐる

ぼくたちはすべての審判に〈否〉とこたへるかもしれない

そうして牢獄の夜が

どんな破局の晨にかはらうとも

ぼくたちはそれに関しないと言張するかも知れない

ぼくたちは支配者からびた一文もうけとらず

もつぱら荒涼や戦火を喰べて生きてきたと言張するかもしれな

い